自費出版・個人出版のための交流情報誌　2007年10月10日 発行　編集・発行 NPO法人日本自費出版ネットワーク

2007年
10月
第14号

PPマガジン

Personal Publishing

〈特集・私の一冊（わが社の一冊）〉

CONTENTS

今年は京都で開催　第六回日本自費出版フェスティバル　2
色川大吉日本自費出版文化賞選考委員長の講演　抄録
　― 日本自費出版文化賞の10年をふり返って ―　6
〈特集・私の一冊（わが社の一冊）〉
　思いでいっぱいの童話集　大西雄二　11
　『生かされて』に見る虐殺の論理　石寺隆義　13
　南木佳士氏のエッセイ　横山純子　16
　捨てられない「マニュアル」　筑井信明　18
　「日本自費出版文化賞」がとりもった出版　清水英雄　21
　カフカ「変身」論　落合冬至　23
次回のテーマ〈ちょっと長い年賀状〉　10
数字の表記基準　18
日本自費出版ネットワークからのお知らせ　24

写真提供　黒坂昭二氏

今年は京都で開催
第六回 日本自費出版フェスティバル

日本自費出版ネットワークは、七月二十一日に恒例の「自費出版フェスティバル」を京都市二条の「弥生会館」で開催しました。第六回目の今年も、全国から表彰者や会員・協力会員など一二〇名以上が参加し、盛り上りを見せました。今回は関西地区での開催になり、日本自費出版文化賞の表彰式や著者交流会・交換会、記念講演会と対談、夜には記念パーティも開かれました。

おもな内容は以下のとおりです。

・自費出版著者交流会
・日本自費出版文化賞の入賞・入選・一次選考突破作品などの展示
・自費出版相談コーナー
・記念講演会　講師：色川大吉（歴史家・日本自費出版文化賞審査委員長）
・対談　色川大吉氏＆中山千夏（日本自費出版ネットワーク代表理事）
・第四回自費出版アドバイザー認定式
・第一〇回日本自費出版文化賞表彰式
・懇親会

記念講演会

自著への思いを発表――著者交流会

自費出版フェスティバルではお馴染みの「著者交流会」ですが、今回も活発でした。自費出版ネットワーク新出理事が司会を担当、最初に、今回、作品を出品された方々を順に紹介、著書の内容などについて話していただきました。ついで、あらかじめ意見発表を申し出ていた著者や飛び入りの発表希望者が次々に登場し、自分の著書やその出版の経緯、テーマ、内容などについて各自予定された時間をオーバーするほどの熱のこもったスピーチを披露しました。

交流会風景

記念講演会と対談

色川大吉氏と中山千夏氏の対談

今年は、日本自費出版文化賞第一〇回を記念して記念講演会を開催しました。講師は、歴史家で第一回から文化賞の審査委員長をつとめている色川大吉氏です。自費出版の最近の動向やシニア層がその中心であることの社会的・歴史的背景を、これまでの文化賞入賞作品の流れをもとに解説しました。（P6に抄録）

この講演に引き続いて、中山千夏・日本自費出版ネットワーク代表理事が加わっての対談が行われ、最近の自費出版を取り巻く状況などが鋭く、しかもなごやかに話し合われました。

文化賞表彰式

日本自費出版文化賞は、社団法人日本グラフィックサービス工業会主催・日本自費出版ネットワーク主管で開催されています。主催者を代表してあいさつした日本グラフィックサービス工業会の山本副会長が「言葉を大事にする業界でありたい」と述べました。

表彰式では、今回の文化賞の入選作品に続いて、奨励賞、部門賞、大賞の受賞者が次々に表彰され、盛大な拍手をあびました。

最初に、第一〇回日本自費出版文化賞の入選作品の表彰。入選作品は全部で五八点ですが、この日来場の

過去の受賞作品に見入る人々

方が壇上に並び、受賞者を代表して『いつか歩いた道』の小野寺寅雄さんが表彰を受けました。

次に、入賞作品の表彰に移りました。日本自費出版文化賞では、部門賞とは別に、特に優れた作品に対して特別賞が設けられていますが、今回は『四国赤石山系物語』の安森滋さんが表彰されました。

受賞の方々と中山千夏代表理事

部門賞の表彰では、地域文化部門賞『祈りの絵・淡路島の絵馬』の永田誠吾さん、個人誌部門賞『父の遺稿――その発見から出版まで――』の高橋甲四郎さん、文芸A部門賞『われ鍋にとじ蓋年記――高橋一家の年賀状――』の高橋鍾さん、文芸B部門賞『少年少女のための新編昭和万葉俳句集――昭和二十年八月十五日を詠う』の瀧本博さん、研究・評論部門賞『玉砕の島々　太平洋戦争――戦後60年ルポルタージュ――』の蓑口一哲さん、グラフィック部門賞『創作民話　転読さん』の岡田沙月木さんと岡田雅夫さんが、次々に副会長より表彰を受けました。

最後に、今回の大賞である文芸A部門『祖谷渓挽歌――「学の自由」に殉じた若き京大生を悼みて――』の藍友紀（あいみゆき）さんが、日本自費出版ネットワーク中山代表より審査委員を代表して表彰されました。

続いて、中山代表から入選・入賞の皆様にお祝いの言葉が、また受賞者を代表して、大賞受賞の藍さんから挨拶があり、恒例の写真撮影で、表彰式を終了しました。

色川大吉日本自費出版文化賞選考委員長の講演　抄録（講演全部ではありません）
――日本自費出版文化賞の10年をふり返って――

■日本の自費出版はシニア文化

日本自費出版文化賞は次の六部門に分かれています。文芸部門はA部門（小説・戯曲・詩集・エッセイ・童話など）とB部門（短歌・俳句・川柳など）に分けてありますが、これらが全体の約四〇％を占めています。これに個人誌部門を加えますと約六〇％になります。非常に多いですね。あとは地域文化部門、研究・評論部門、グラフィック部門がありますが、圧倒的に自分史的なものや文芸的なもの、歌集や句集などが多い結果となっていますので、日本の自費出版文化はそういう傾向があるといえます。

応募者の年齢をみますと、一番多く応募されている方は六十二歳から六十三歳の方です。還暦を迎えて、ちょっと自分の人生をふりかえり、その二年後くらいに本ができるといった状況です。その次に多いのが喜寿です。日本の自費出版はシニア文化といえると思います。残念なのは、若い方の作品が非常に少ないことです。これはこれからの課題でしょう。

■「若者が輝いていた時代」と「老いの時代」

そこで、この一〇年間をふりかえってみますと、最近の日本の社会は、ますます「老いの時代」という意識が、社会の前面にでてきたようです。今年は、参議院選挙もありますから、提示されている大きな課題を見ても分かります。ほとんどが年金、介護、福祉、少子化、これらは全部高齢化にかかわる問題です。それから格差の問題もでてきています。こうしたものが社会のトップニュースになり、多くのマスメディアが取り上げるということは、いかに時代が「老いの時代」に入っているかが分かります。

最近、私は一九六〇年代の歴史の本を七〇〇枚程書きました。現在と当時のコントラストが非常に際立っていますね。一九六〇年代というのは「若者が輝いていた時代」です。学生や青年たちが歴史の主役をなして、社会の前面にでていました。その頃に学生や青年だった方が会場にもたくさんいらっしゃると思いますが、自分のことを思い出してください。当時の新聞では、政治欄やトップページにはいつも若い人がでてきました。今は政治欄や一面に若い人はほとんどでてきません。たった四〇年の間に、それだけ時代が変わってしまったということです。

その当時輝いていた二十代、三十代の人たちが、今は六十代、七十代になっています。その人たちが自費出版文化を担っているのです。「若者が輝いていた時代」から、今は「老いの時代」になってきました。しかし私は、しばらくするとまた若い人が前面に出てきて輝く時代がくると思っています。

歴史家は一〇〇年単位で社会の動きをみています。歴史は何回も繰り返していますからね。例えば幕末から明治維新にかけては若い人の時代でした。伊藤博文にしても、山県有朋にしても、西郷隆盛にしても、大久保利通にしても、みんな若いころから活躍していました。明治維新で活躍したのは二十代、三十代です。若い人が輝いて、歴史を動かしてきたのです。

明治の終わりにくると、「老いの時代」になります。年寄りが社会の前面に出てきて時代を動かす時代になります。昭和の初めに再び若い人の時代がやって来るのですが、今日のような繰り返しになっています。

歴史は世代によって大きく変わってきます。今、日本は「老いの時代」ですが、このまま日本はだめになる、とは私は思っていません。また再び若い人の時代が来るからです。これから日本はだんだんよくなっていくと思っています。今が一番悪い時期ではないでしょうか。

若い世代の元気がないわけではありません。元気はあります。ただ、それが社会の正面に出て、時代を推進する表舞台に出られないような、いろいろな障害が作られてしまっているのです。これは少しずつ直していかなければなりません。若い人たちの力で破壊していかないとだめです。また、だんだんと変わっていくでしょう。

この一〇年間の自費出版の歴史をみても、そういった時代のうねりが感じられます。そんな認識をもって自費出版を考えていくと、これからのいろいろな問題が見え

てくるのではないかと思います。

■若い人たちの自己表現

若い人は自己表現をしていないのかというと、そうではありません。インターネットをやっている方はご存知だと思います。インターネットにはYahooやGoogleという検索エンジンがありますが、試しに「自分史」というキーワードで検索してみましたら、何と七八万八〇〇〇件もでてきました。「自費出版」で検索すると、さらに大きな数字がでてくることになります。

インターネットという新しいメディアの世界で二十代、三十代の人は自己表現をしているのです。それは「ブログ」というものです。アクセスした人がコメントを書き込めるようにもなっています。こういった若者の自己表現は、活字の世界にはあまり出てきていませんが、すでに自費出版の準備段階といえるものが進行しているのです。私たちの目がそこに向いていない、活字になっていないだけなのです。

応募作品をみても、確かに六十代以降の人が多いのですが、四十代以下の人もさかんに応募しています。かなりの力作もあり、受賞した作品もあります。沖縄から北海道まで全国各地から応募されています。自費出版は、何年もかけて自分の作品をまとめて出版されています。それは大変嬉しいことだと思います。

■一般性を持ち人の心を打つもの

この一〇年の「自費出版文化賞」の積み重ねによって、今まで自費出版は友人と親戚など、ごく身近な人の間だけにしか通用しないと思われていたものが、実はそうではなくて、一般性や普遍性を持ったものとして存在しうるのだということが、証明できるようになってきました。この活動の全国的な広がりの中で、地域の新聞社が自分のエリアから「自費出版文化賞」の受賞者がでたことを報道してくれることによって、自費出版が新しい意味で再評価され、認識されるようになってきたのではないかなと思っています。

応募の点数は最初の三年間は非常に多く、一〇〇〇点を超えた時もあります。それまで、どこで発表していいのかわからない作品が溜まっていたわけです。そうした作品が応募されてきましたので、かなりの応募点数があ

りました。今はそれが安定してきて年間一〇〇〇点弱くらいに推移してきています。また年々、内容の水準が高くなってきていることは嬉しい傾向です。

　自分がつくった本はかわいいですから、初めのころは、是非だれかに見てもらいたいと応募してくるわけです。中には、自分の書いた本は売れるのだと確信を持っている人もいたようです。実際には売れませんがね（笑）。そのうちに、自費出版といえども一般性を持ったもの、人の心を打つものでないとだめなんだなということが分かってきます。

　個人史や自分史などは、一生懸命に書くから中には力作もあります。細かいし正確ですね。叙述も熱が入っているので読ませます。でも他人が読むと全然興味がない。これはしょうがない。自分がどうしたとか、息子がどうしたとか、嫁さんがどうしたとか、それは書いた本人には大事かもしれませんが、私には関係ないという読者が多いわけです。一般性がないわけです。

　その一般性をどのように表現するか、もうひとつ工夫して感動させることが大切です。

■アドバイスを受けて「一般性」を

　自費出版は売るためにやっているわけではありませんが、売る本をつくるためには、装丁をよくしたり、おもしろいタイトルをつけたり、プロの編集者に依頼しないとできません。プロの編集者に依頼すると、校正はもちろん校閲までしてくれます。また「あなたは一章から六章までを順番に構成していますが、六章を先にもってきて、五章と四章の順番を入れ替えると読みやすくなる」とか、「序文はやめて、あとがきにもっとおもしろいことを書きなさい」とか、さまざまなアドバイスをしてくれます。そういうプロセスがあって売れる「商品」ができるわけです。

　自費出版は多くの場合、そうしたプロセスがありません。しかし、最近は自費出版に対する編集者がでてきま

した。また、日本自費出版ネットワークでも「自費出版アドバイザー」を認定して、自費出版に対するアドバイスを行う活動をしていますから、相談するといいかもしれません。いろいろとアドバイスを受けることで、一般性がでてくるということもあります。

もちろん、身内だけに向けた一般性のない著作があってもいいでしょう。

しかし、いろいろな人にも読んでもらうために、著作に「一般性」を持たせたいと考えるのなら、自費出版もプロの編集者に相談する時代にきているのかなあとも思います。

（協力・東京グラフィックサービス工業会）

次回のテーマ

ちょっと長い年賀状

不特定の読者への「年賀状」です。近況、今年の決意、生活信条のお知らせなど、通常の年賀状では書ききれない、あるいは身近な人には却って言いにくいようなことでもかまいません。思いを存分にご披露ください。自費出版ネットワーク関係者約四〇〇人のもとに届くことになります。ちょっとどころか、かなり長くてもかまいません。（二〇〇八年一月中の発行予定）

・以下の原稿も引き続き募集します

■「私の一冊」（わが社の一冊）

感動した本、人生の転機になった本、なつかしい記憶の中の本――出会いやきっかけはさまざまでしょうが、あなたの思いでに残る「本」（広い意味の書物）について自由にお書きください。ご自分の著書のことも、もちろん大歓迎です。関連する写真もあれば送ってください。

■「私の十年」（わが社の十年）

二十世紀から二十一世紀へという大きな変化をはさんだこの一〇年は、社会的にも文化的にも大きな動きがありました。また、われわれ同時代に生きている者にとりましては、人生後半の一〇年というのはそれ以上に時の流れを感じさせる歳月であったかもしれません。一〇（数）年間というこの歳月を念頭にいれた原稿をお寄せください。関連する写真もあれば送ってください。

特集

私の一冊（わが社の一冊）

思いでいっぱいの童話集

大西　雄二

渓流を遡行していく道は、やがて山間の小集落にたどりつく。近づくにつれ、胸のたかまりを覚える。変わらない山や川の自然のたたずまいに、幼児期の記憶がよみがえってくる。集落の入り口では地蔵が出迎えてくれる。風雨にさらされ、石塊のようになった路傍の地蔵に、懐旧の思いにとらわれる。往診先の老婆は庭先の花を切り、新聞紙にくるんで、私を待っていた。

終戦末期に、両親は市内の空襲を逃れて疎開した。医師の父の患者であった集落の出身者の紹介によるものだった。私は戦後まもなくそこで生まれ、幼児期をすごし、戦後の混乱期が過ぎてから市内に出てきた。

人間の感受性は幼年時代に決定されるのではないか。私には、疎開先の田舎で生活した体験が、その後の私を決定した、と思えてならない。

それは、忘れられない本があるためである。少年のころ私は、千葉省三（明治二十五年～昭和五十年）の童話に親しんだ。『新日本少年少女文学全集28巻千葉省三集』（ポプラ社）である。この一巻に代表的な作品はすべて収録されており、解説と年譜も充実していて、この童話作家の全容を知ることができる。奥付を見ると、昭和三十五年の四月に発行されている。私は十三歳のころに読んだ。そして今もこの本は手元にあり、変色したページをめくるたびに、疎開地で暮らした時期を思い出し、心が和み、癒される。すべての作品が郷土色豊かで、土のにおいがする。

代表作『トテ馬車』のなかの「虎ちゃんの日記」「鷹の巣とり」など、田舎の子どもたちを生き生きと描いた作品の印象は、今も脳裏に焼きついている。

「高原の春」という作品がある。田舎と町からきた子どもが、高原の秘密の泉に行くという僅か数ページの小編である。そこには輝く陽光のもと、むんむんとにおうばかりの春の草原がある。手つかずの自然がある。躍動する子ども

たち、土地の子どもと町からきた子どもの交遊、生活の違いなど社会性も垣間見える。

また「乗り合い馬車」の校長の一家、町からやって来た校長の息子という関係は、わが家のそれと少しだけ似ていたのだろうか。

「仁兵衛学校」では、寺子屋もどきの小さな学校での、老教師と児童の素直な感情の交流が描かれる。

「兵隊彦さん」には村の戦傷者をとおして、作者の反戦の意識を感じ取ることができる。

緑の丘陵地帯の上に拡がる青い空と白い雲、野の花々、夜の静寂さと月と星の輝き。夏には歓声をあげ水遊びをし、うっかり深みにはいり、溺れかけた川。鮎が銀鱗を見せていた。家の前の道路の先はどうなっているのであろうと、子供なりに頭を一杯にしたものだ。

生活のために父は開業した。診療をとおして地元の人たちと強く結びついた縁は、父のあとを継いだ今も途切れない。医療過疎地であるため、私の代となっても患者が来てくれる。高齢のため、誰かが寝たきりとなり、往診に行き、集落の健康をもう二十年以上見続けてきた。私が最期をみとった人もいる。

同時に自然環境の変遷も見てきた。環境の変遷は、哀しいことに、自然の荒廃に繋がることが多い。かつての清流には魚影が少ない。巡回バスが土煙をたてた道は舗装され、家々の屋根はかやぶきよりスレートぶきになり、草々が繁茂した川岸はコンクリートで塗り固められた。それでも、季節の移り変わりは今でも、市内よりその集落に行った時の方が実感できる。

土と親しみ、自然を相手にする度合いは、都市部に比べ、比較にならぬぐらい多いのであろうが、文化的には都市と田舎の違いはうすくなってしまった。これでは感覚や発想まで均一化してしまうのではないか。年少期には自然を相手に遊んだ方が人間性もはぐくまれるし、長じては豊かな古里の思い出になる。現在のように田舎のすみずみまでマスメディアがいきわたり、どこの子どもも同質の感動しか得られない時代には、もうこの童話で描かれた世界は、遠い世界になってしまった。

千葉省三の童話に描かれたのと同じ環境が、私の自然観をつくった。大気と土と水の匂いが私の体内に染みついている。人々との絆も切れない。縁の大切さ、生きることの尊さを教えてくれたのは、私が幼児期を過ごしたこの集落であった。かつての疎開地は、私の魂が帰る地である。

『生かされて』に見る虐殺の論理

石寺　隆義

この本は、東アフリカのルワンダという小国で起きた少数民族に対する虐殺事件の記録である。事件の発生は、一九九四年。長年ルワンダではフツ族とツチ族の対立があり、国民の八五％を占めるフツ族が、一四％のツチ族を虐殺する事件がたびたび発生していた。そうした民族対立の戦後の歴史の中で起きた事件だが、一九九四年の事件は、フツ族の大統領を乗せた飛行機が首都の飛行場で撃墜されるという衝撃的事件が起きた後発生しており、フツ族の一般市民までが狂気の殺戮者集団に加わったため、一〇〇日間で一〇〇万人のツチ族が虐殺されるという悲劇が生じた。

著者のイリバギザ女史は、当時優秀なツチ族の大学生であったが、家族を含め次々とツチ族の関係者が殺されていく中で、小さなトイレに身を隠した結果、奇跡的に生き延びることができた。大きな精神的ダメージを受けた彼女ではあったが、敬虔なクリスチャンであったがゆえに、精神的に立ち直っていく。

事件後ルワンダに派遣された国連軍で働き、事件が収束した後彼女の家族を殺害した者と面会したが、それは彼女がよく知っていたフツ族の実業家であった。彼が彼女の家族を虐殺した（彼女も殺そうとした）のは、結果的には彼女の両親の家を奪い、農園を奪うためということになるのだが、彼女は彼を許すことによって、さらに精神的安定を得る。こうした悲劇の女性の魂の葛藤が描かれているので、多くの人に感動を与える書となっている。

ところで、彼女はクリスチャンであるから、こうした悲劇を繰り返さないようにするには、人びとが神の愛に目覚めることで、解決しようとしている（家族の虐殺者を許すのも、そのためか？）ように見えるが、これは適切な対応策といえるだろうか。

何故彼女の家族と親しかったフツ族の実業家が、彼女の両親の財産を奪うために虐殺したのか。その背景には、フツ族の実業家といえども、他人の財産を手に入れなければ生計が成り立たないような経済的事情があったからではないのか。

彼女の家は、この本に述べられているように、ルワンダでは恵まれている方のようだ（大学にもいける身分なのだから）。しかし、大部分のフツ族の人びとは極貧にあえいで

おり、そこには日頃から、ツチ族に対する嫉み、僻みのようなものがなかったか。

彼女の話では、何世紀もの間ツチの王が統治していたルワンダは、両民族が平和に仲良く暮らしていたという。ツチ族は少数派でも、支配階層であったのだ。ツチ族は背が高く、鼻が細いという身体的特徴があり、フツ族は背が低く、鼻は平たいという身体的特徴があるそうだが、長年の間、両民族が共存した結果、混血が進み、今日では両者を区分することが難しくなっているという。

それにもかかわらず、両民族を区別したのはいかなる理由によるものか。

ルワンダを植民地として支配したのはベルギーであるが、ベルギーは、顔立ちが西欧的で少数派のツチの貴族たちを支配階級にした。これによりツチ族はよりよい教育を受けることができ、経済的にもベルギーの要求にこたえて、フツ族よりは富裕層を形成することができた。さらに、ベルギーは両民族をはっきり区分するため、人種証明カードを導入し、これが今日まで引き継がれた結果、両民族の溝が深まり、フツ族に積年の恨みが残り、大虐殺の基礎になったのではないかと彼女自身が語っている。

これだけではない。第二次大戦後のアフリカの独立運動が、民族の独立という点では評価できても、経済的な独立という点では逆にマイナス面が大きく、人口の過剰とあいまって、貧困度を増している点である。

特にルワンダのような、人口増加率の高い国（それは過去に豊かな国の証でもあった）は、貧困度が増しても出生率が低下せず、（子供を労働力と考えているから）益々貧しくなるという悪循環に陥っている。一九九四年の大虐殺においても、職のない若者が、政府直属の虐殺団に多数加わった結果、大虐殺が可能となっている。

さらに、こうした不安定な社会では、権力者が自らの責任を問われないように、外部に敵を作るようにし、民衆の敵愾心を煽ることで民衆の不満を自分に向かないように仕向けている。

過去の虐殺でルワンダを逃れたツチ族が、難民として隣国に多数存在しており、彼らは祖国復帰のためルワンダ愛国戦線（ＲＰＦ）という組織を作って、復帰のチャンスをうかがっている。これを利用して、フツ族の権力者はＲＰＦがルワンダに攻め込んでくる、これを応援するものはルワンダのツチ族だという虚報を流布して、虐殺を行うのである。

また、政府関係の放送局も、ツチ族をゴキブリと称し、「ツチのゴキブリどもはフツを殺そうとしている。政府を

乗っ取って、我々を迫害しようとしている。ルワンダからゴキブリを一掃せよ」などと煽動を繰り返している。こうした日ごろの煽動にフツの一般市民までがマインドコントロールされてしまったところに、悲劇を拡大した要素があった。

以上のような様々な要素が加わって虐殺が行われるのだから、キリスト教的愛に訴えても、これを阻止することは難しいように思われる。

混乱のおおもとが貧困にあることは明らかであるが、資源が限定されている小国では、貧困を直ちになくすことは不可能で、地道な経済振興策を興していく以外に道はない。特に、職のない若者が、政府軍や反政府軍に加入して戦闘を繰り返すことを避けることが先決であり、何らかの失業対策事業を考える必要がある。

また、人口過剰が貧困の発生源なのだから、出生率を抑える方策が採られなければならない。宗教的理由から産児制限が難しい場合は、女性に働く機会をより多く持たせることである。女性が男性と同じように社会進出できるようになれば、今日の我が国のように、子供の数がおのずから制限されるようになるだろう。

イリバギザ女史は、ルワンダに派遣された国連調停団の一人と結婚し、現在ニューヨークに住んでいるとのことだが、今後の行動に注目したい。サハラ以南のアフリカ諸国は、いずれも貧困にあえいでおり、それが原因で、ルワンダほどでないにしろ、内乱状態の国が多い。これらのアフリカ諸国はアジアのような発展の兆しが未だ見えない状態であり、放置すればさらに状況が悪化するものと思われる。この若い二人は、ルワンダの経験を活かし、アフリカの改革に取り組んでくれることと思うが、アフリカの過半数の人々が、彼女のようにお互いを殺しあう愚かしさに気づき、その誤りを是正する方向に向けば、現在のカンボジアのような安定が得られるだろう。

南木佳士氏のエッセイ

横山　純子

エッセイを書き始めて六年になる。

石の上にも三年というが、私はその倍の年数を重ねたことになる。が、長いか短いかはあまり関係がないようだ。要は、文才があるかないか。テーマがはっきりしているかぼやけているか。読者に共感をしてもらえるか否かが、ミソなのである。

ところが、他人の書いた文章は、あーだ、こーだと平気な顔で批評したりするのに、自分で書いたものとなるとまるで分からなくなる。私が母親になったばかりの頃、産まれて間もない我が子がどんなちんくしゃでも、他人のどの子よりも愛らしいと思い込んでいた親バカぶりと同じだ。そうなると、私の文章が相当な駄文であっても、いとおしくて、目に入れても痛くないほど可愛いくて、どうしようもなくなるのである。

そんなちんくしゃで可愛いらしいエッセイたちの中から、さらに選りすぐり、昨年は初めてエッセイ集を出版した。そして懲りもせず、今年は二冊目に、苦しみながらも楽しく挑んでいる。そんな中、いま夢中で読んでいるのが、南木佳士氏の作品だ。エッセイ教室で、『ふいに吹く風』の「運動会」に出会ってから一冊ずつ買い揃え、あっという間に八冊目になるまで、南木氏の内容の深い作品にすっかり嵌まってしまった。

氏は、作家と医師の二足のわらじを履いている。ほとんどが死にかかわる著書で、看護師の私にとっても興味ある内容だ。芥川賞受賞の『ダイヤモンドダスト』。映画化された『阿弥陀堂だより』。これらは小説だが、エッセイにおいても死に関する作品が多い。

死に対する捉え方は、同じ医師であってもそれぞれ違っている。氏と同じ病院で働く脳卒中専門医が、リハビリに懸命に励む患者と接する中で、命はしぶといものだと実感しているのに対し、肺癌専門医の氏は、患者の傍にいながら、何一つ打つ手のない悔しさと虚しさに打ちひしがれ、命は水の泡のようにはかないものだと、『ふつうの医者たち』の「在宅医療」で明らかにしている。

南木氏の観察力に、私はすっかり虜になってしまった。特に、氏の書く自然描写は、自分がその場所に今いるのではないかと錯覚してしまうほど、文章だけでくっきりとしたイメージが湧いてくる。たとえば、「運動会」の冒頭は、「私の住む信州東部の山に囲まれた平野は雲の美しい土地

である」

ベッドに寝転んで、ビールを飲みながら気楽に読んでいた私は、「雲の美しい土地」という文章に、頭をガーンと叩かれたようなショックを感じ、飛び起きて姿勢を正した。そのあと、氏は八月の雲を、次のように説明する。

「空が青い色を保ったまま高くなれる限界にまで高度を上げて広く展開し、さまざまな形の純白の雲がゆっくりと流れる」

いきなり私を、信州東部の山に囲まれた八月の平野の中に誘い込んだのだ。さらに、

「夕焼けの赤と澄んだ青が微妙に混じりあって文学では伝達不能な美しい色が生まれる」

と続く。私はその美しい空の色を、氏の隣に立ってじっくり見つめながら、無言でうなずいて感動を分かち合った。

その上、南木氏の表現力も群を抜き、目を見張るものがある。

「名作と言われる文学作品の中には必ず、人間とは存在することそのものが寂しいものなのである、という一節が含まれている」

繊細な自然描写から一変して、重みのある文章がドーンと迫ったかと思いきや、間髪を入れる間もなく運動会へとつなげるのだ。

「空と寂しさの話となれば、これはもう運動会である」

四十七行の短いエッセイで、バランスよく十一行目から本題のテーマへと入っていく。

「舞台の上でスポットライトをいっぱいに浴びたいのなら、懸命に走らなければならない。マスゲームの平凡な一員でいいなら、マイペースでゆっくり走ればいい。ただ、参加している限りは観客であり続けることは許されない」

氏の主張は、はっきりしている。そして最後のしめは、

「やはり人生は運動会である。だからどうした、といわればそれまでのことではあるが……。」

私を緊張したままで終わらせはしない。ちゃんと力を抜いてくれて現実に引き戻し、心地よい睡魔と、おまけに苦笑いまで誘ってくれたのである。

氏の書くエッセイの中でも、特に私のお気に入りは、妻が絡んでいる文章である。『ふいに吹く風』の「秋の怖さ」で、映画『二・二六』の南果歩を見ながら、一緒に映画を見ている妻の耳元でささやく。

「あんな女と暮らしていたら、オレの人生も変わっていたろうな」

すると、

「あっ、私もおなじこと考えてた」

妻は答え、

「視線は南果歩の夫役である三浦友和を、食い入るように見つめていた」

と続く。軍配は紛れもなく妻にあり。と、私はエールを送った。ところがそのあと、

「ものを言えば寒いから、秋は書く」

最後のこの一文に、思わず「お見事」と叫び脱帽したのである。

よーし、これから書く私のエッセイは、氏にあやかって内容で勝負するぞ！

南木佳士氏の深みのある文章を、私は何としてでも書きたいと、テーマを真面目路線に決めはしたのだが……。

数字の表記基準

おおまかですが、以下のように決めます。

＊基本は漢数字とする。

＊和暦、年月日、年齢は位数字を入れる。

（例：昭和五十三年十二月二十五日）

＊それ以外は自由だが、なるべく統一する。

＊固有名詞、慣用的な表記はそれにしたがう。

捨てられない「マニュアル」

筑井　信明

コンピュータのマニュアルが『本』にあたるのかどうか定かではありませんが、通常使い捨てのマニュアルのなかで捨てられずいまだに手元においてある何冊かがあります。すぐ思いつくものはＳＨＡＲＰのポケコン（懐かしい言葉です）ＰＣ１３５０の取扱説明書。もう一冊は、管理工学研究所のデータベースシステム「桐Ｖｅｒ２」の機能解説書。いずれも使い古して汚れていますが、発行日付を見ると前者が一九八四年で今から二十三年前、後者が八七年で二十年前ということになっています。どちらも思い出がありますが、ＰＣ１３５０は、これではじめてコンピュータ言語（ＢＡＳＩＣ）を勉強したという記憶であり、「桐Ｖｅｒ２」のほうは、本格的な実用システムを作成して、その後の人生の一部を決める（誤る？）一因ともなったソフトといってもよいものです。

この「ポケコン」を使っていた頃、私は、印刷業界の団体で、機関誌の編集やさまざまな事業活動、委員会などのための資料作成をやっていました。この時代は、中小企業

でも使える実用的なコンピュータの黎明期で、近い将来にその知識が必要になることはわかっていましたが、このポケコンは仕事のためというより完全に個人の趣味の感覚で購入したと思います。価格は忘れてしまいましたが、19KBのメモリーを持ち、24桁×4行の液晶ディスプレイにグラフィックも描け、BASIC言語が使えるなかなかのモノでしたね。どこにでも持ち運べるという思想は現在のモバイルコンピュータの原型です。この当時は使う人が自分でプログラムを作成するという時代でしたから、附属してきたマニュアルはA5判で三〇〇ページ近くの大冊で、その中に「プログラム」なる章があり、BASICでのプログラム作成入門になっていました。ここで私は基本的な制御構造や関数、変数などを学んで、簡単なアンケート集計から競馬ゲームなるものまで数種類のプログラムを作成して遊びながら基礎の勉強をしました。肝心の本体のほうはどこかにいってしまったのですが、マニュアルのほうだけは残っているというわけで、なかにアンダーラインが引いてあったりして懐かしいものです。

その頃、一九八〇年代に入ってからでしょうか、OA（オフィスオートメーション）という言葉が流行していました。要するにこの時代に事務処理の生産性向上が社会的な問題になりはじめ、それに対応するシステムが誕生し始めたということです。特に、画期的だったのが、ワープロとよばれる専用機の登場で文書作成保存が電子的に可能になるという時代になり、職場の関係もあって私は比較的早くこうした作業に取り組み始めたように思います。やがて、パソコンの機能が向上して仕事に使えるようになりました。最初に考えたのが宛名印字処理で、これをNECのオフコンでやったのが多分私の最初のパソコンでの事務処理でした。ただ、これはLANFILEという専用ユーティリティのマクロを使った簡単なもので、もっと自由にできないかと考えていたときに、通産省の仕事の関係で知り合ったあるひとに話をすると「うちの会社で出している「桐」というソフトを使ったら」ということで評価版（といっても本物です）を無料で送っていただきました。この人がメーカー（管理工学研究所）の主任研究員だったのです。この「桐」のバージョンは2で、FDでの起動も可能という、今では信じられない仕様でしたが、基本構造は本格的なリレーショナルデータベースで、いま思えば非常に完成度の高い製品でした。「桐」はその後、DOS版、WINDOWS版と進化して現在のバージョンは9になっていますが、基本的な処理構造は二十年前からほとんど変化していません。

機能面で私の気に入ったのは「一括処理」とよばれる本

格的な開発言語を内蔵していて、利用者の技術があれば相当のことができるようになっていたことです。言語仕様はＢＡＳＩＣに似ているので、ポケコンでの勉強も役に立ちました。私は業界内で勉強会を開いたり、各種の情報交換会に参加したりしましたが、ある開発業者の主催した研修会で、長野の電算印刷㈱のプログラマが「文字データを加工処理して、自由にテキストファイルに出力するプログラム」を発表して、それを教えてもらったときには、いわゆる「コンピュータ組版」への無限の応用を感じたものでした。その後、少したってから、私はこの「桐」などを使った業務システムの開発を「仕事」にするようになりました。「桐」は、ＷＩＮＤＯＷＳ版開発の出遅れやＳＱＬ言語への対応ができないなど仕様の古さが目立つようになり、現在ではＡＣＣＥＳＳなどの他のＤＢソフトに完全にその地位を奪われてしまいましたが、いまでも用途により便利なソフトとして使用されています。

パソコンソフトがまだ個人レベルでも作成できた時代には、機能解説書（マニュアル）も開発者が自分で書くのが普通でした。初期の頃は、マニュアルにユーモアのセンスを入れることが定番になっていて、読んでいても面白いものがたくさんありました。その後、パソコンが「ビッグビジネス」になってしまうとそうした傾向はなくなり、作る側にも余裕がなくなってきたのでしょうか、あるいはインターネットで修正がオンタイムでできるためでしょうか、最近はオンライン化が進み、「紙のマニュアル」はつけないというのが一部の家電なども含めて多くなりました。これは、便利なところもありますが、一覧性や使い方に制限があり、非常に残念な気がします。

数十年前の学生時代の数学の教科書を製本しなおして、いまだに持ち続けている人のことを知っています。同じように、通常は無味乾燥の代名詞みたいに思われているマニュアルですが、私は意外にこれを読むのが好きです。模型を作る人が設計図をみてわくわくするような感じかもしれません。奥深く、興味の尽きない機能の可能性をそこに感じるからです。ページを開いて、色あせた書き込みなどをながめていると、その時に熱心に取り組んだ自分の精神状態まで蘇ってくるような気がします。あえて、マニュアルを『一冊の本』とさせていただいた理由です。

「日本自費出版文化賞」がとりもった出版

清水　英雄

二〇〇三年六月、山梨にお住まいで日本自費出版文化賞の最終選考委員である土橋寿先生から、新聞の切り抜きを送っていただいた。

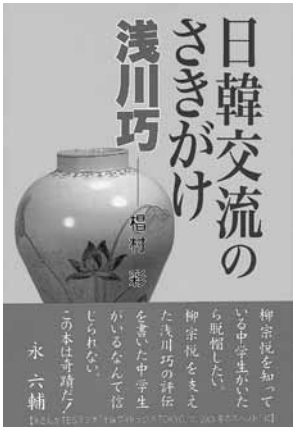
新聞は、朝日新聞山梨版と山梨日々新聞で、そこには「日本自費出版文化賞」最年少受賞の椙村彩さん（当時十四歳・中学三年）のことが報じられていた。椙村さんの著作は『浅川巧――韓国の山と民芸を愛し、韓国人の心の中に生きた日本人』という中学二年生（入賞当時中三）の夏休みの自由研究だった。

浅川巧は、日本が「韓国併合」で朝鮮を支配していた一九一四（大正三）年、二十三歳で兄浅川伯教のいる朝鮮に渡った。現在のソウルにあった林業試験場に勤務し、森林伐採で禿げ山となっていた山林の緑化に努める一方、民衆の暮らしの中で育まれた陶磁器や膳など民芸品の蒐集・研究に尽力した。そして、日本民芸運動の創始者柳宗悦や兄伯教とともに「朝鮮民族美術館」を設立した。だが椙村さんがもっとも浅川巧に惹かれたのは、「日本が植民地政策をしていた時代に、独学で朝鮮語を学び民族衣装のチョゴリを着て、地元住民と分け隔てなく生活していた人間浅川巧。国家、民族、宗教で人を差別せず共生の道を貫いた生涯」だと語っている。

浅川巧は一九三一（昭和六）年に四十歳の若さで亡くなったが、その棺は韓国人が担ぎ、彼らの手によってソウルの共同墓地に埋葬され、今でも守り続けられているという。

私も日本自費出版文化賞の運営には携わっていたが、関係した部門が違っていたので、新聞を見るまでこの本の存在はまったく知らなかった。記事を見て一番驚いたのは、浅川巧と椙村彩さんの出身地が山梨県高根町だったこと。高根町は私の出身地でもある。当然、出身小学校も同じ高根西小（巧と私のころは村山西小学校）。さらに驚いたのは、椙村さんの住所。高根町蔵原とある。蔵原は上・中・下と三集落に分かれているが、杉でない「椙村」の苗字は珍しく、私と同じ下蔵原に一軒あるだけのはず。私はみぶるいした。いつしか受話器をとっていた。

早速椙村さんの本を取り寄せて一気に読んだ。私が小学生のころは、浅川巧の「あ」の字も語られることはなかった。日本と韓国の微妙な歴史の関係で抹殺されていたのだろうか。自分の先輩に、こんなすばらしい人がいたことが誇らしかった。中学生の自由研究で浅川巧を調べ上げた椙



村さんの情熱にも感動した。

昨今「韓流ブーム」といわれ、ようやく日韓の交流もはじまってきたが、まだまだ両国の間には、理解しきれない深い溝がある。いまこそ、梱村さんと同年代の若者にこの本を読んでもらいたい、その想いが一気に膨らんだ。私の手で、市販本として出版できないものか。

その年の七月十二日の「日本自費出版文化賞」表彰式には、梱村さんもお母さん同伴で上京するという。私は、思いの丈を込めて、ラブレターを書いた。浅川巧研究の第一人者である津田塾大教授の高崎宗司さんとの関係もあり、いくつか出版の話があったようだが、年の瀬も押しせまった十二月、我が揺籃社で出版と決まった。

急いで原稿を精読し、原稿の手直しとどうしても書き足して欲しいことがらを決めて、梱村さんに依頼した。中学生の内に書き上げることにこだわって、高校受験で忙しいなか三月末までに原稿を整えてもらった。その間に私は、梱村さんの研究を積極的に支援してくれた高崎宗司さんや、高根町にある「浅川伯教・巧兄弟資料館」の清水九規さんらと会合を重ねて出版の準備をすすめた。

こうして、二〇〇四年六月一日に四六版一六〇ページの『日韓交流のさきがけ――浅川巧』の出版にこぎつけることができた（初版二〇〇〇部）梱村さんとの約束で、山梨県下の中・高校の図書館に寄贈した。このときも、新聞や関係する雑誌が大きく報じてくれて話題になった。

本は、「浅川伯教・巧兄弟資料館」はじめ、資料の提供をしてくれた「日本民芸館」「京都高麗美術館」などで扱ってくれているほか、山梨県下の書店にも協力をお願いして、当社のような小出版社としてはほぼ初期の目的を達成している。

後日談になるが、自費出版ネットワーク代表理事の中山千夏さんを通して、作家の永六輔さんに謹呈しておいたら、ラジオ放送で数回にわたって紹介していただけた。二〇〇六年四月増刷の折、永さんに「帯文」をお願いしたら、思いがけず書いていただくこともできて、当社としてはロングセラーを続けている一冊である。その後、永さんと梱村さんは山梨の「浅川伯教・巧兄弟資料館」でお会いしたとも聞いている。

カフカ「変身」論

落合　冬至

カフカは一八八三年生まれ、一九〇八年より平凡な書記として勤務したが、持病のため十年で退任している。一方、文学活動も続けていた。この二重生活が「変身」という小説の母体となっている。

小説に登場する家族も、カフカの家庭がモデルになっている。

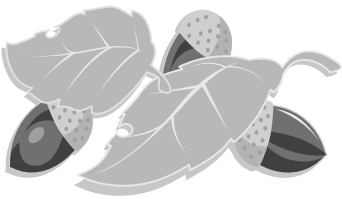
このような平凡な家庭が背景になっているが、作者の二重心情は、平凡な生活とは、正反対なのである。ここから小説の世界へはいってゆく。この正反対の心情は一匹の毒蟲に投影されているのである。

こう見れば、ある朝主人公のグレゴオル・ザムザ氏が、一匹の毒蟲に変身したのは、不可解な出来事ではなく、この小説を鑑賞すれば、至極当然のことなのである。これは作者の心象風景で、出勤を中止し創作活動に専任し始めたのである。

家族から見れば、平凡な生活を唯続けること、それが価値観であるが、主人公から見れば、その平凡な生活のなかで、創作活動を続ける苦悩や家族との断絶が、この小説の根底に流れている。

二重生活の緊張感の中で、主人公はある日出勤を中止、即ち変身する。日常生活にとって負（毒）の条件である。即ち毒蟲に変身するという設定である。

この設定は、父親から投げつけられた林檎によりできた心の傷が、原因になり主人公が死んでしまい、家族は緊張感から解放されるところから推定できる。そして家族はサンサンと陽が射し込む郊外へ、電車に乗りピクニックへ出かけるのである。



日本自費出版ネットワークからのお知らせ

■　第11回日本自費出版文化賞の募集を開始

今年も日本自費出版文化賞のスケジュールが決定しました。部門は昨年までと同じですが、高度に専門性のある内容は審査できない場合があることが明記されるようになりました。応募部門、審査日程は以下の通りです。

・応募部門
　(01) 地域文化部門
　(02) 個人誌部門
　(03) 文芸Ａ部門　　(04) 文芸Ｂ部門
　(05) 研究・評論部門
　(06) グラフィック部門
・募集期間　　2007年８月１日～11月30日
・１次選考　　2008年１月～３月
・２次選考会　2008年４月12日～13日
・最終選考会　2008年６月３日

■　自費出版フェスティバル、京都で開催

本誌記事のとおり、第６回自費出版フェスティバルが開催されました。自費出版著書フリーマケット、交換交流会、記念講演会・対談、第10回日本自費出版文化賞表彰式、懇親会と盛りだくさんな内容でした。

■　編集部から

▼新聞広告でおなじみの、いわゆる共同（協力）出版の費用や販売に関するトラブルは以前から指摘されていましたが、この７月には、Ｓ社を相手どった「詐欺的商法による損害賠償」の訴訟がおこされました。これはマスコミでも広く報道されたのでご存知の方も多いと思います。また、この動きとは別に「共同出版・自費出版の被害をなくす会」も発足しました。どちらの運動も、これから具体的な事例を集めて被害の実態を明らかにした上で活動を続けていくようです。自費出版をめぐるこうした問題の難しさは「被害実態」が見えにくいということですが、多くのひとは、「契約」や「費用分担」について虚偽説明ではないかとの疑念を抱いているようです。自費出版ブームの陰の部分にも注目です。▼自費出版フェスティバルは酷暑の京都で行われました。記念講演会で色川委員長は「日本の自費出版はシニア文化」と述べていました。もちろん、色川先生は、いまの日本の若者に表現意欲がないわけでなくネット上のブログなど別の形をとっていることを指摘していますが、出版がメディアの主流から外れつつあるのは確かなことなのでしょうか。

「PPマガジン　Personal Publishing」　2007年10月10日発行　第14号

編集・発行　NPO法人 日本自費出版ネットワーク

〒103-0001 東京都中央区日本橋小伝馬町7-16
電　話：03-5623-5411
ＦＡＸ：03-5623-5473
ホームページ　http://www.jsjapan.net/pp/
（専用閲覧、投稿ページがあります）　　定価（1,000円＋税）